

特集

今、見えてきた益田市の歴史文化の特色



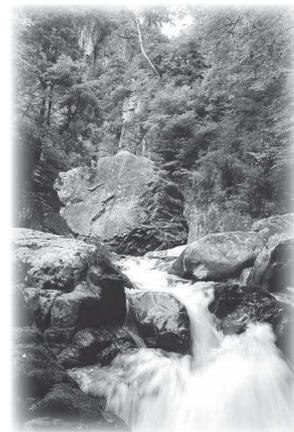
雪舟が築いた万福寺庭園(史跡および名勝)

◆益田市歴史文化基本構想

益田市では、益田市の豊かな歴史文化を後世に確実に伝え、活用していくための基本方針となる益田市歴史文化基本構想(以下、「構想」)を今年度策定することとしています。このため、平成23年度から皆さんの協力を得て、市内の歴史・文化・自然に関する様々な遺産を把握する調査を進めてきました。また、益田市歴史を活かしたまちづくり検討委員会において構想の内容を検討してきました。



表匹見峡・小沙夜淵

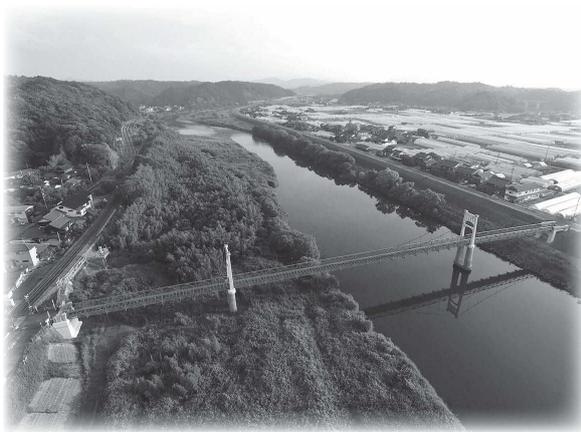


裏匹見峡

◆益田市の歴史文化の特色

構想の策定にあたって、益田市の歴史文化の特色はどのようなものであるかを考えてきました。

益田市は歌聖・人麿、画聖・雪舟それぞれゆかりの地であり、近年は中世の領主益田氏も大きく注目されるようになりました。また、美都の都茂鉾山は国内の鉾山で最も長いと言える歴史を持ち、匹見の縄文遺跡群は西日本随一の内容を誇ります。歴史以外にも、西中国山地、清流高



高津川と飯田吊橋

津川・匹見川、日本海の美しい自然は全国屈指と言えます。また、長い歴史の中で人々によって連綿と育まれてきた文化的な景観にも素晴らしいものがあります。

構想ではこのような歴史文化の特色を、いくつかの魅力的な物語にまとめています。それらは、これまで『広報ますだ』の連載「益田市の歴史文化の特色」(平成30年6月号)でも紹介してきましたが、本特集では江戸時代以降のものを紹介します。



都茂鉾山の大間歩跡

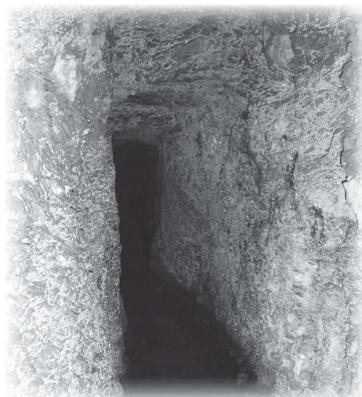


現時点で石見最大の前方後円墳・大元1号墳(県史跡)

## ◆幕府領・津和野藩領・浜田藩領の境界の地

江戸時代の益田は、江戸幕府の直轄領、津和野藩の領地、浜田藩の領地に分割され、さらにそれらは複雑に入り組んでいました。

そのため、各領域をつなぐ街道として、沿岸部の山陰道と山間部の津和野奥筋往還をはじめ、沿岸部と山間部をつなぐ街道が整備されました。これらの街道の痕跡として、各地に石畳の跡



蟠竜湖疎水。岩盤を約200mくり抜く大変な工事でした。



飯浦と津和野藩の鉱山を結ぶ街道の痕跡を示す美濃の一里塚。

や藩の境を示す藩境石が残るほか、美濃地町には一里塚も残っています。

一方で、境界の地であるがゆえに、幕末の石州口の戦いでは、多田町の扇原の関門は戦場となりました。

また、この時代、様々な人々の活躍により産業が大きく発展しました。高津の沖田では、長嶺嘉左衛門が蟠竜湖疎水を開通させ、荒地の開発に成功します。遠田の国東治兵衛は、い草の栽培と畳表の製造を導入し、特産品として根付かせました。他にも、喜阿弥焼や白上焼、石州瓦などの窯業、山間部でも鉱山開発やたたら製鉄、林業なども、様々な産業が発展しました。



石州口の戦いの戦端が開かれた扇原の関門

## ◆柿本人麿の伝承と信仰



松崎に人麿を祀る神社があったことを示す松崎の碑。

益田市には、万葉の歌聖・柿本人麿がこの地で亡くなったとする伝承があります。また、戸田を生誕地とする伝承も多く残されており、市民は人麿を「ひとまるさん」と親しみを込めて呼んでいます。

人麿が高津で亡くなったとする見方は、中世の時代には確認できません。中央の著名な文化人が「たかつの人丸」に歌を寄せるなどしています。この頃の社は、松崎にあったと考えられています。

1681年、この社は津和野藩主亀井茲親により現在の高津柿本神社の地に移転再建されます。現在の本殿は1712年に建造されました。全国の人麿を祀る神社の本社と言われます。



人麿出生地の伝承を持つ戸田の柿本神社

一方、戸田の柿本神社は724年の人麿没後にこの地に創建されたとい、代々綾部氏が宮司として社殿を守ってきたといえます。人麿の母はこの綾部氏の娘だと、この柿本神社の由緒は伝えていきます。

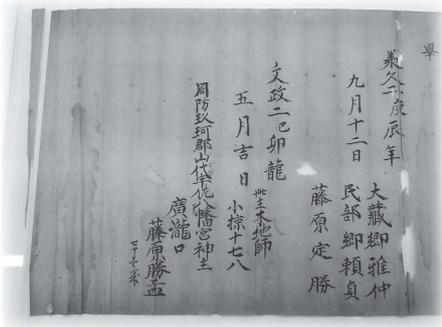
人麿の生誕伝承は、全国的に見ても他にないものです。現在の本殿は、1822年に亀井茲尚により創建され、あわせて人麿童子像が寄進されました。周辺には御廟所(遺髪塚)、足形石、伝承岩など人麿の伝承に関わる文化遺産が伝わります。

◆ 豊富な山林資源と

清流高津川・匹見川の恵み

地域の約85%、美都や匹見では約95%を占める林野は、豊かな恵みをもたらし、かつては1万人以上の人々が山林資源を糧に生活をしていました。たたら製鉄は、大量の木炭が必要なことから、山中に多くのたたら場が設けられました。たたら場で働く人々が信仰した金屋子神かなやごしんの祈禱書きとうしょも残っています。

また、匹見は木地師きじしや杣人そまびとの里として繁栄しました。木地師は轆轤ろくろ師しともいい、轆轤を用いて椀や盆などの木地の器を作りました。匹見には木地師の墓や轆轤などの道具、権利を主張するための文書など、木地師に関する文化遺産が豊富に残されています。



木地師がその権利を主張するために用いた小川家木地屋文書(市古文書)



横田中学校の校庭に隣接する水神の森



匹見のわさび田。かつて「東の静岡、西の島根」と名を馳せていました。

そして、人々は、これらの山林を源流とする高津川・匹見川や益田川などの河川からも、多くの恩恵あずかに与あつてきました。それは、鮎あややわさびといった特産品はもちろん、用水や水運の点でも重要な意味を持ちました。横田町の剣先けんさきで取水された匹見川の水は、水神の森で三方向に分かれ、横田町と安富町の多くの農地を潤しています。

◆ 戦争・災害・過疎と向き合つ

た歴史

近代以降、益田も様々な苦難に直面します。

戦争では益田の人々も出征し、尊い命を落としました。戦争で亡くなった人々の慰霊碑いれいひが市内各所に建てられています。東仙道や真砂から満州開拓団が派遣されましたが、敗戦により開拓地を失い、大変な危険を冒して帰国せざるを得なくなりました。

高津川・匹見川や益田川は、多くの恩恵を与えてきた反面、歴史上、幾度も水害を引き起こしてきました。近代以降では特に、昭和18年、47年、58年に大規模な水害が発生し、いずれも甚大な被害をもたらしました。

また、昭和38年の豪雪では、山間部の集落が長期間孤立する状態に陥りました(38豪雪)。



東仙道開拓団の碑。開拓団の経緯や団員の名が刻まれています。



益田川災害復旧竣工記念碑。水害から復旧工事までの概要が記されています。

昭和30年代後半からのエネルギー革命や、生活様式の欧米化などによって、炭焼きや林業などの山間地産業が不振となりました。これに38豪雪が追い打ちをかけたかのように、匹見では人口減少が急速に進みました。地域によっては挙家離村きょかざいそんが相次ぎ、50%近い減少率となりました。

このような苦境にあつて、当時の大谷武嘉たけよし匹見町長は「過疎」の問題を積極的に発信したほか、多くの人々が「村おこし」に真剣に取組みました。

このように振り返ると、益田の歴史文化の豊かさにあらためて気づくとともに、現在の益田を輝かせるヒントを得ることが出来ます。近代以降の苦難も、人口減少社会に突入し、災害が頻発する現代日本にとつて得がたい経験と教訓を与えてくれるものです。